会報 高鷲の文化財
第４５号
令和４年３月１日発行
高鷲文化財保護協会
題字：麦島　博昭　氏

郡上鷲見氏820年準備会の報告！

鎌倉時代の鷲見氏

１なぜ鷲見氏の研究をするか。

毎週水曜日の学習会の中で、「郡上東氏八百年・古今伝授五五〇年祭」が大和フィールドミュージアムをメイン会場としていろいろな講演・和歌の会等の催し物が開催されています。

鷲見城本丸跡

高鷲町には昔から『鷲伝説』があり、鷲見大鑑や濃北一覧に記載されているように、藤原北家の流れをくむ藤原頼保が鷲退治をした功績により天皇から鷲見姓をいただいて、鷲見城を築城した（一説には頼保の孫の家保）という言い伝えがあり、現在の町名がついています。令和三年七月七日の文化財学習会の時に『鷲見氏八二〇年』を迎えるに当たり、記念事業実行準備委員会を組織して、鷲見氏に関する文献調査、外部講師の講演、鷲伝説絵本の作成、鷲見大鑑や穴洞白山神社累縁記など古文書の読み下し本の作成等、記念事業を考えています。しかし、このような大事業を高鷲文化財保護協会や記念事業実行準備委員会だけでは荷が重いため、運営委員会を設置して市役所、振興事務所、自治会長会、鷲見家の会、鷲見頼保公奉賛会、財産区等に協力を願いしたいと考えています。

鷲見城の築城には諸説あるが、鷲見大鑑には三代家保が築城したとあるので、本準備委員会では、鷲見城を築城したのは家保と定めました。その根拠は承久の乱後、家保は鷲見郷の地頭に鎌倉幕府より任命され、祖父の頼保が文治元年（一一八五）の地頭制度ができたとき本補地頭に任命され、これを受け継いだと考えられからです（証拠になる文献なし、地元での伝承）。

２鷲見氏の系図　（高鷲村史より、歴代城主で鎌倉時代まで）

藤原鎌足 —— 藤原不比等 —— 藤原房前 —— 藤原魚名 —— 藤原家保 ——

— ① 藤原頼保 —— ②重保（頼保の３男）——③家保（重保の長子）——

— ④保吉（家保の長子）——⑤長保（保吉の長子）　○印は城主

鷲見氏の由来については、いろいろ言われていますが、鷲見家譜によると「大治、保延の年号にて論旨二通頂戴所持仕候」とあります。この年代は崇徳朝（1130 年頃）でありりま

す。居住地は鷲見郷であって、藤原姓からの出身という。当時は平氏の全盛時代であって、これに反抗した藤原成親は断罪に処せられ、同族の多くは平氏の圧迫に耐えれずやがて源氏が起こるとこれを頼りにして意を通じたのは当然のことです。頼朝が諸国に地頭を置くに当たって頼保は武蔵権守に任ぜられ幕府の御家人として郡上の鷲見郷の地頭になったのです。しかし村史によるとこの時はまだ鷲見姓を名乗らず、長保の子の忠保の時代で、南北朝時代から室町時代の最初にかけてと考えられます。

3 「鷲見大鑑」に見られる鷲見姓

現在、町民センターにて「古文書読もまい会」を本会主催で行っています。その読み下し文を優しく表現した文章の内、鷲見姓に改称した部分について述べます。
承久3年（1221）7月1日にご誕生になられ、その後、お名前を武蔵権守と申されました。その時代は、天皇が世を治めていた時です。天皇は正月2日に夢を見られ、「この場所から北東に不思議な鷲が巣を作っている」と言うところで夢が覚められました。天皇は、武蔵権守に「鷲を退治せよ」と命じられましたので、武蔵権守は家来36人を連れて美濃国へ来られました。岐阜の奈ヶ良という処にご宿泊になり、翌日、奈ヶ良の渡し舟に乗られたところ、川上より鷲の羽が一羽流れてきましたので、権守様は不思議に思い、その羽を自らの手で拾われました。拾われた白い羽根を見ると、長さ4尺7寸（178cm）、その内側に金色の八幡という字が書いてありました。この川上に鷲の巣があるに違いないと確信せられ、郡上方面へと上られました。その羽を小野村にお預けになられました。今の八幡はその時から羽を納めた宮祝いとして名付けられました。

さて、権守様は八幡より家来を二手に分けられ、明方口小駄良口、権守様は上之保へと進まれました。神路村に御宿泊なされ、その夜に神のお告げを受けられました。それによると「この川上に雲ヶ嶽という嶮山がある。急いで雲ヶ嶽へ参れ」という夢でありました。権守は急いで神路を出発なされ、雲ヶ嶽を目指されました。この時よりここを神の路と書いて「かんじ」と読むようになります。

権守様は岩高村で宿をとられ、山口才三郎というものに案内させ、雲ヶ嶽へ向かわれました。すると鷲の鳴き声がかすかに聞こえ、さらに3丁ばかり進むと、確かに二声鳴き声が聞こえた。権守様はこの谷の奥深くに鷲の巣があるに違いないと思われ、それから小ふたごえ、大ふたごえという処で休憩されました。さらに谷深い山の奥に上られると、不思議なことに鷲の羽根が二羽落ちているのを発見され、これを拾われました。それ以来この地を大城・羽落といいます。その間は五日間に及んだが、鷲の姿は発見できませんでした。

さらに山奥の草木が生え、道が失くなった所へ、岩高村の蓑島小左衛門というものが百姓3人連れて迎えに来た。小左衛門は権守様へ、「鷲の巣の在りかはわかりませんので、お迎えに上がりました」と申し上げると、権守様は「たとえ5，7日かかっても鷲の巣の在りかを見届けん」と言われました。小左衛門は「さらに山深い奥へ行かなければ発見できないでしょう。ここはひとまず宿へ帰られては」と申し上げました。すると権守様は、「お前の言うとおり、一先ず帰るとしよう」と申され、家来8人を小城・大城に残し、小左衛門の案内で母屋の後ろにある召使が住む家（下屋）という処から、尾根伝いに七暗がり谷を通って岩高村に帰られました。その時からこの地を向鷲見村というようになりました。

権守様は11日間ここにご逗留なされた。その時、山口才三郎が来て「4日ほど前から雲ヶ嶽の8分目に日の出の4つ頃、時々一度づつ鷲が目撃されたた」と申したので、権守様は大変喜ばれ、人足64人と小左衛門と共に一緒に上られて、弥つか尾大清水というところに庵を作られました。それから人足に雲ヶ嶽へ

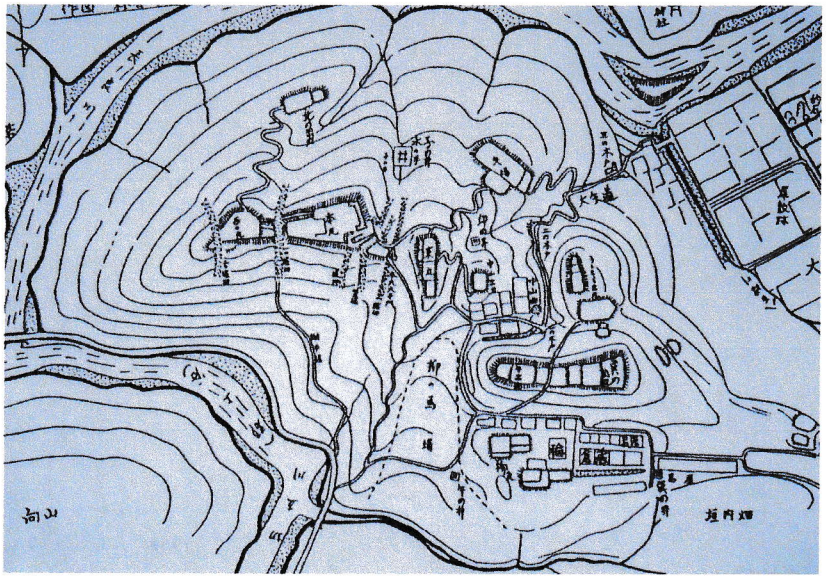
鷲見頼保公顕彰祭（鷲ヶ岳いっぷく平）

の道を切り開かせ、5 月上旬にお上りなされました。すなわち現在、大屋という処は、この所であります
　同じ日に、権守様は鷲の巣を発見なされ、鷲を退治なされました。この鷲をご覧になりますと、鷲の大石打という尾羽が一羽なく、これは長良で拾い上げた羽に間違いないと思われました。それから 6 月 3 日に都へ戻られ、天皇にご報告なさると、天皇は大変喜ばれ権守様に、ご家名を改めさせ、鷲見姓をお与えになりました。」
　つまり、鷲退治のご褒美として、天皇から鷲見姓を頂戴して、藤原武蔵権守頼保が鷲見武蔵権守となったと解釈できます。

4 家保の鷲見城築城

家保は、元長 3 年（建長 3 年？ 1251）5 月 1 日に美濃国の芥見庄内の川西と川東を知行地として 1623 石を天皇から鷹見料として安堵されました。
　向鷲見村にはお城を建てられ、その検分のお役人に稲葉大膳を命じになられ、同 5 年 8 月 3 日に鷲見城は出来上がりました。下記の図は、その縄張り図です。

鷲見城大手門跡



鷲見城縄張り図（林春樹作成）

5 承久の乱と鷲見氏

　承久の乱とは、承久元年に鎌倉幕府将軍源実朝が殺害され、源氏の政党は断絶しました。その後、執権北条氏は京都から九条頼経を将軍に迎えて、幕府を存続させました。そこでかねてから朝廷の回復を目指していた後鳥羽上皇が北条氏追討の軍を出しました。そのため尼将軍北条政子と執権義時が御家人たち諮り、東海道・東山道・北陸道より大軍を進め京都に入りました。戦後幕府は仲恭天皇を廃し、後鳥羽上皇以下三上皇を遠流に処し、倒幕に味方した公卿・武士を処罰し京都六波羅に探題をもうけて朝廷を監視させ、京都方についた者の所領 3000 余箇所を没収して功績のあった武士に与えました。
　この承久の乱(1221)は、中世における最も大きな戦乱の一つであって、美濃、尾張を境として西は主に宮方につき、東は幕軍についています。美濃国は西濃地方は宮方に、東濃地方は土岐氏が幕軍に味方したので、その勢力下にあった郡上地域は幕軍に味方したのです。その時、鷲見城主鷲見頼保の孫の家保の代でした。家保は土岐氏に従い幕軍に属して京都まで従軍されました。その功績によって鷲見郷を美濃国守護の土岐光衡によって安堵されたのです。
　安堵とは、武家時代に将軍や守護など有力者から所領の知行を確認保証してもらうこと。

6 京都大番役

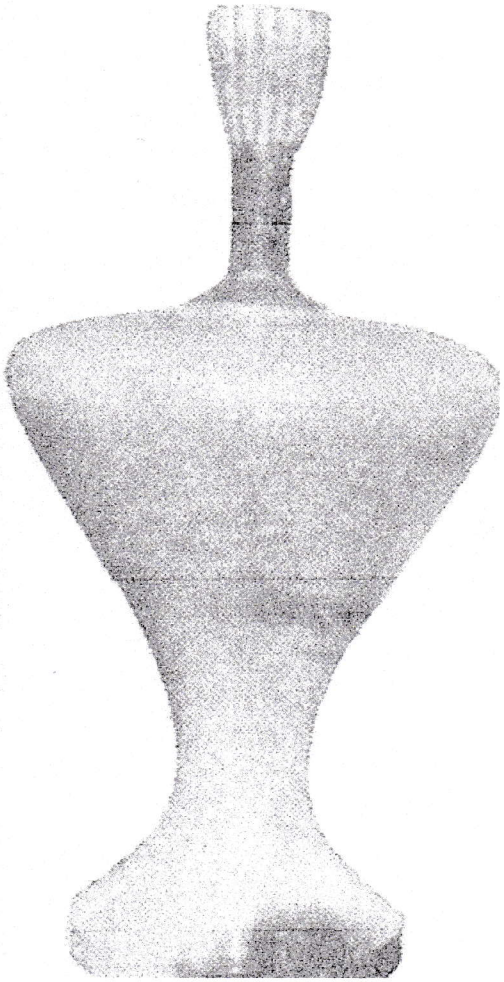
家保の子保吉と諸保は弘安 8(1285)年に京都大番役の任務に就いていることが村史に書いてあります。

「美濃国御家人鷲見藤三郎入道宝仏跡大番□事た□り安吉分七月一日より八月一五日に至る三□□諸安分八月一六日より九月三〇日に至る内裏二条西土門に於いて物仕られ候仍て執達件の如し」

この文章にある大番役とは内裏諸門の警護役で、律令制の衛士制の衰退と共に諸国武士をして警備させたことに始まります。源頼朝が全国の警備権を得たので、御家人をして交替してこの任務に当たらせました。統括機関は侍所・六波羅探題で、各御家人は守護の召集統率を受けて、惣領支配のもと勤番した。期間は六ヶ月または三ヶ月間で、御家人に課せられた最も重要なもので、室町時代以降この制度はなくなりました。

鷲見の敬願寺に木製朱塗りの酒壺があって、これを大平壺と呼んでいますが、寺伝によれば、昔京都の御所で大判の節会あって寺祖はその度に参朝し、天杯を賜るのが例になっていたが、参朝を欠いたので、わざわざ送られてきたのがこの壺であるという。しかし、それは誤りと村史には書いてある。大判は大番が正しく、鷲見郷の地頭であった鷲見氏が前述の大番役に当たって京都御所にいたとき、賜宴の栄を得た記念の遺物であって、何時しか寺に移った物だろうと断定しています。なお、現在この太平壺はどこにあるのか不明ということです。

鎌倉時代最後の鷲見郷の地頭は正安 3(1301)年 6 月 5 日に死去した長保であった。その子の忠保の活躍は次の南北朝から江戸初期までの編にて述べる。



太平壺（村史より））

次回は「南北朝時代から江戸初期までの鷲見氏」についてお知らせします。